



miho Hatanaka,

産まれることにも、老いていくことにも、人が生きることや姿、在りように関心をもつ。生活するということとはごく単調なことの繰り返しのようであるが、それぞれの人の生き方が日々の所作にもあらわれるものだと思う。今回は、食べ物に纏わる話と、一編の詩を。



【第4話 もやしのひげ根に想う】

もやしのひげ根を取るようになったのはごく最近である。育ち盛りの子どもたちがいる食卓を調べていたころにはそのように手間をかけることもなかった。口に障るようになったのは、落ち着いて自分の食事ができるようになったからか。彼らは今それぞれに、自分や家族の食事を作るようになってもやしをどのように調理しているだろう、彼らがまだごく幼い頃でも気にせずにしたことをやや申し訳なく思う。ひげ根で思い出すのは、末の子が幼児の頃、やはり幼い子を持つ友人の家を訪ねた時に彼女が私と話をしながらひげ根の始末をし、せっせと手を動かしていたことである。「ああ、そのように手間をかけるのか!」と感心したものの、見倣うことなく長く過ごした。気にはなっていたその“行為”を今、する私は、かつての母の食卓を想う。

母はまた、大家族を抱える主婦であった。3世代の家族の世話一切を遣り繰りするのは大変なこともあっただろう、私にとっての母の思い出は、食事を作る後ろ姿や、洗上がった洗濯ものをぱんぱんと叩いてのばす音、階段の隅・廊下を丁寧に雑巾がけする

といった“働く”姿に纏わる。その母がもやしのひげ根をどのようにしていたかは覚えていないが、細かく刻まれた菜っ葉の漬け物や、くたっとするまで煮た煮物が祖父や祖母のためのことであったのは覚えている。歯ごたえもなく子どもの口には不要な手間のようにも思えたが、今となってはその細やかさの意味が感じられる。母はまた、“今のちある者”だけではなく“いのちなき者”の食事も調えた。仏前に、正月には雑煮の丸餅を小さく切って白みその御汁をかけ、盆には精進料理を幾品も用意して供えた。雑煮はともかくとして、なすや干し椎茸、こうや豆腐の炊いたんなどは、私も今でこそ喜んで頂くが、子どものころは色も地味な、おいしくもないものとしてありがたく感じなかった。それでも「お盆にはご先祖さんがみんな帰ってきはるんえ」などと大人たちから繰り返し聞いて育った身としては、仏壇のなかの大小の仏さんごとに幾つもの器が並べられ、明らかに普段とは違う“もてなし”をする様や、いつときして仏壇から下げたお下がりを戴くことは、みえないものとのつながりを感じる事ごとであった。

母についてまた思い出すのは、夕飯の支度をしながら涙をぽろぽろとこぼし、たまねぎを切っていたことである。それも一度や二度のことではない。私はそれに気がつく、タオルの端を水で濡らして母に「はい」と手渡した。幼いながらに、「たまねぎを剥くとは、これは大変なことだな」と思いながらも、何か感じるどころがあったのかもしれない、私は、そうやってなんとなく母の傍にいて過ごした。大きくなって自分がたまねぎを切ってみると気づくことであるが、確かに目には染みても泣くほどのことはない。切る前に冷蔵庫で冷やすといった技のようなことも知ると、「母はよほど鈍くさかったのかなあ？」と思うこともあった。

でも、いや、だから違うんよ ー。

たまねぎについて、ずっと尋ねることもなかったが、先日、2年ぶりに帰省した折に、ふと思い出してその話をしてみた。すると母は、「そうやねえ…。そういうこともあったかもしれへんねえ…」となつかしそうに言った。後日には、誰に言うともなく「おばあちゃんのお世話ができて、よかったんや。私は」と、独り言ちてうなづいた。母は、“父に”、ではなく祖母に“嫁いだ”ような感じさえもっているのかもしれない、そうやって自分の生きてきた日々を肯定しているようであった。過ぎた日々の事ごとについては知る由もない、晩年、すっかり人が丸くなって母を一番の頼りにしていた祖母は、几帳面で筋の通った、凜としたひとであった。

その祖母はもちろん、父も、子のいなかった伯母もみんなその手で看取り、母はこの数年ですっかり歳をとったように感じる。今年、まだ夏が終わったばかりの頃、涼しくなったら久々に我が家にやって来ないかと誘ったことがあった。その話に、大喜びをした母からなかなか返事が来ずに電話をかけてみると「やっぱり、やめとくわ…」とのこと。あれほど出かけるのが好きだった母に、新幹線などを乗り継いでの遠方への旅はもう、要らないのかもしれない。

今日、我が家の庭の銀杏、樺、桜、もみじ…、樹々は色づいて美しい。葉が覆う地面を見ながら、母に見せたいな、と思う。「この家に母が来ることは、もうないのかもしれないな…」と思いながら、見上げると空はきれいな晴れだった。

【farm の思い出】

どの季節にも
風景のなかに なつかしい と感じる “気配” のようなものがある
よく晴れた秋の庭を見ながら、

アメリカで暮らしたころの、farm に向かう道を
今日は思い出す

大きなパンプキン
機械でぎっくりと束ねたわら
シナモンと粉砂糖をまぶしたりんごのフリッター

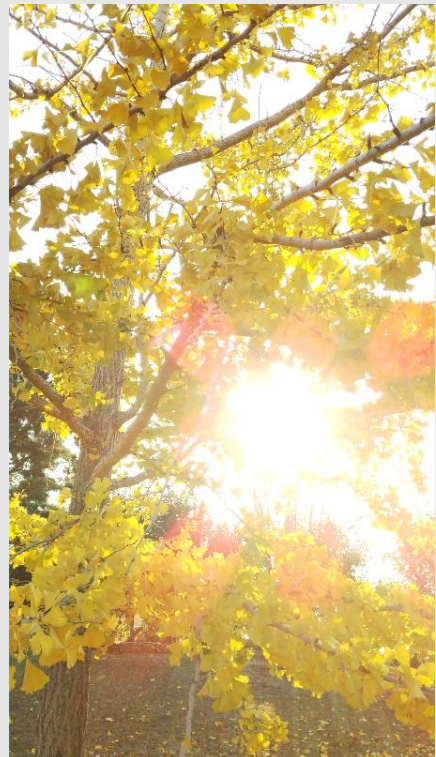
その農場に向かう田舎道を 車で走った

子どもたちがまだ 幼い頃
小さな くつ で喜んで駆け回り

今日、そのことを思い出すとは…！

わたし は

その景色をこころのなかに持っている



autumn